**語り手と視点―村上春樹「タイランド」から**

西田谷　洋（富山大学）

　物語論は構造言語学をモデルとして理論化されており、現代言語学が認知言語学等様々な展開をしているとすれば、物語論はヴァージョン・アップされねばならない。私が以前進めていた認知物語論は、認知言語学の術語体系で物語論を捉え返そうとした。物語表現は対象に対する把握のあり方が投影されていると考え、視点と語りを区別せず、誰が見ているものとして提示しているかという視点と語りを統合して分析することを主張した。

　日常会話・日常言語と物語・文学言語とは発話／語りの構造は異なるが、前者から後者への派生・複雑化が生じていると考えられる。人格化された語り手が存在しない物語もあるが、その語りは無色透明中立公正ではない。（語り手が）いかに語るのかという語りの運用的な切り口は、物語論の基盤が構造言語学から別の言語学へ転換することと対応する。

　私は、視点を語り手が統御するという立場を採用するため、動的な展開は語りの原点からの時制によって捉えられ、歴史的現在等の日本語によく見られる過去形・非過去形混淆状態はシナリオ的な図式化、見取り図的な全体像、あるいはスクリーンを見ながら語るために生じると考える。また視点は語り手にあるため、参照点移動によるスキャニング的な対象把握の運動が語り手の意識の志向性をふまえた表現の構築に反映しているとも考えた。自由間接話法も形態論的な有標性に注目せずに考えるならば、相互テクスト性の原理に基づけば、その言葉は様々な視点の現れとも解釈できる。そうした問題を中村三春氏の『フィクションの機構２』の村上春樹「タイランド」解釈に導かれながら考察してみたい。